「お金に愛されないエンジニア」のための新行動論（6）：

老後を生き残る「戦略としての信仰」は存在するのか

https://eetimes.itmedia.co.jp/ee/articles/2208/31/news047.html　[PDF出力]

今回は、「老後を生き残る「戦略としての信仰」」をテーゼに掲げて検討していきます。宗教は果たして私を幸せにしてくれるのか――。それを考えるべく、「江端教」なる架空の宗教団体をベースに話を進めます。

2022年08月31日 11時30分 更新

[江端智一，**EE Times Japan]**

今回のテーマは、すばり「お金」です。定年が射程に入ってきた私が、あらためて気づいたのは、「お金がない」という現実でした。2019年には「老後2000万円問題」が物議をかもし、基礎年金問題への根本的な解決も見いだせない中、もはや最後に頼れるのは「自分」しかいません。正直、“英語に愛され”なくても生きていくことはできますが、“お金に愛されない”ことは命に関わります。本シリーズでは、“英語に愛されないエンジニア”が、本気でお金と向き合い、“お金に愛されるエンジニア”を目指します。

宗教は私を幸せにしてくれるのか

前回のコラムで、お金を増やす方法としての最適解が「インデックスファンド」である、という目処を得て、これからの私の投資の方針は決まりました。

しかし、インデックスファンドには大きな弱点があります。「時間」です。それも10年単位の時間が必要になる、という厄介な問題です。**正直、私は10年出遅れた**、という感じです。

もっと早くから、「お金に愛されない自分」をキチンと理解していれば、こんなことには・・・いや、ダメだっただろうなぁ。だって私、今でも、「投資」に対して、今一つ、燃えないからです。

前回の原稿を書き上げた後で、この件について後輩と話していたのですが、私の勤務している研究所においても、投資で既にかなりのお金を稼いでいる研究員もいるらしいことを知りました―― それも『明日、会社を辞めても大丈夫』という位のお金、らしいです。

江端:「それって、もう本人の資質だよね」

後輩:「そうですね。『そういうことに興味がある』というのは、もはや『才能』だと思います」

お金に愛されない者は、何をしても愛されない、と書きかけて ―― ん？ このフレーズどこかで使ったぞ、という記憶がよみがえってきました。

これでした。私、このコラム「英語に愛されない者は何をしても愛されない、という出発点」で、英語と私の関係について、既に結論を出していました。なんのことはない、私は、英語だけでなく、お金にも愛されていなかった、というだけのことのようです。

「お金に愛されない」のであれば、ここは開きなおって、「**お金がなくても、幸せな余生をすごせる方法を検討するべきではないか？**」と真剣に考えるようになってきました。

そんなことを考えていた時に、あの「元首相暗殺事件」が発生しました。そして、今、その殺害事件の動機になったと言われる宗教団体とのトラブルと、政治家との癒着や、省庁の不透明な教団名称の変更プロセスなどが、取り沙汰されて、連日ニュースとして取り上げられています。

私の日記（ブログ）を読んで頂いている方はご存じかもしれませんが、私、結構な頻度で、いわゆる「カルト」と呼ばれる宗教団体と対決し、独学でも調べてきました（カルトについては、後程キチンと説明します）。

しかし、私は、これらの宗教団体を、最初から「敵」と認定して、対峙してきましたので、当然、それらの宗教団体の負の側面しか知らず、その撃退方法しかスコープに入っていませんでした（筆者のブログ1、筆者のブログ2） —— というか、カルトの正の側面など、その存在すら考えたこともないからです。

しかし、**布教にくる人間たちの、あの張り付いたような不気味な笑顔と、ゾワっとするような猫なで声**を思い出すにつれ、もしかして、**あの笑顔と声の中に、私の目指すべき老後の生存戦略があるのではないか**、と考えるようになりました —— いや、江端が狂い出しているわけではありません。私は本当に必死なのです。

そもそも、人間の幸せは、定量化や計算で客観的に計測できない世界の中にある、ということは、「高校野球、プロ野球」や「サッカー」で、よく理解しています。

ならば、宗教は、私を幸せにできるのではないか —— 社会的信用を失っても、自己破産させられても、それでもなお、胸を張って「幸せだ！」と言い切れるような「洗脳」を、キチンと施してくれるのであれば、それが、カルト宗教だってなんだっていいじゃないか？と、思えてきたのです。

老後を生き残る「戦略としての信仰」を考えてみる

こんにちは。江端智一です。本日は、これまで続けてきた投資に関して、一休みして、今回は、「お金に愛されないエンジニア」の、**老後を生き残る「戦略としての信仰」**を考えてみたいと思います。

私は、エンジニア的な視点で物事を見るように作られた研究員ですが、別に唯物論者というわけではありません —— 「『宗教』はシステムであり、『信仰』はシステムへの入出力である」という、少々ひねくれた見方をしていますが、それでも、宗教の効果は —— それが、有用であれ、害悪であれ —— 理解しています。

子どものころに、父に連れられていった地元の寄合所で行われていた御岳山信仰の集会では、神様に憑依した神主さんが、私の学業成就のお願いに対して、低い声で厳（おごそ）かに『その

願い、叶える～～！』という声を、頭（こうべ）を垂れて聞いていましが ―― あの白目の顔を作るのは、年季の技だよなぁ ―― と、その「演技」に感心していました。

　小さな下町工場の経営者であった父が、厳しい経営に毎日苦しんでいたことは、子どもの私でも分かっていました。この集会で、父の心の負担の100分の1でも、軽くなっているのであれば ―― 私は、喜んで、**神妙な顔をして「神のお告げ」を受ける茶番くらい、我慢して演じてみせる**、と思っていました。

　比して ―― 母が工場で階段から転倒して、瀕死の重体になった時、どこからともなく現われて、実家の床の間に勝手に祭壇を作った（多分、父は金を払ったのだろうと思う）某宗教団体のふるまいは、私に、**宗教に対する決定的な憎悪と嫌悪感を植えつけました**。

　今回のコラムでは、「カルト」「新興宗教」「カルト宗教」などを濫用すると思いますので、最初にこれらの用語の定義について説明させて頂きたいと思います。

　まず「カルト」ですが、本来の意味は、本来の意味は「儀礼、祭儀」で、批判的な意味は含んでいなかったようです。また、新しい宗教の初期形態も「カルト」と呼ばれていたようです。

　これが、次第に「特定の対象を熱狂的に崇拝したり礼賛したりする集団（宗教団体を含む）」という意味で使われるようになってきたようです ―― 「カルト」がこの意味のままでしたら、熱狂的なアイドルの推し活をする集団も、「カルト」と呼ばれたはずです。

　現時点での「カルト」は、以下の要件で使用されることが多いようです。

（1）反社会的、違法、または、社会通念上の常識に著しく反する信条を持ち、
（2）上記（1）を信仰という手段で実施する団体（宗教団体）、またはその構成員（信者）

要するに「**あぶないヤツら**」ということです。

反社会的、反モラルで、違法行為に及ぶことに躊躇（ちゅうちょ）のない、狂気の宗教団体に安易に手を出すのは、危険です。絶対に止めるべきです＊）。それでも、私の老後を生き残る戦略となるのであれば、一度はちゃんと取り組んでみるべきだ、とも思いました。

＊）今回のコラムは、EE Times Japan編集部にも、家族にも、後輩にも一言も相談せずに、いきなり寄稿しました。

お金に愛されない私の老後に幸せを提供してくれるものならば、それがなんであれ、今の私は手を出さざるを得ないのです。もう私は、なりふり構ってはいられないのです。

今回の前半は、カルト宗教団体についての私の調査研究（ほとんど私のライフワークいってもいい）結果をご覧頂きたいと思います。

なお、このコラムでは、老後を生き残る「**戦略としての信仰**」を考えるものであるので、**カルト宗教に対する批判や非難が目的ではありません**。いつもの通り、エンジニアリングアプローチで、私が知り得た内容を淡々と記載してまいります。

カルト宗教にもいろいろ種類がある

宗教にもいろいろあります。例えば、山岳、海洋、河川等のような自然を対象とした宗教もありますが、多くの宗教は、基本的に「教祖」がいます。で、現在、社会問題となっているカルト宗教のほとんどは、まだ教祖が生存しているか、あるいは没後数十年を経過していないものが多いようです。

100年以上を経過しても生き残っている、という宗教は、反社会的、社会通念上の常識に著しく反する教義を、修正して、うまいこと大衆に溶け込むことに成功しているのです。

さて、カルト宗教の教義について説明したいと思います。私の見たところ、カルト宗教の教義の内容は、大きく2つに分けられます。

（1）**完全オリジナル教義** —— 例えば、江端が「数字教」とか「量子教」など作って立ち上げるケースが、それに相当するかもしれません＊）。

＊）次回、『江端の江端による江端の老後戦略のためのオリジナル宗教の作り方』を検討したいと思っています。

（2）**既存宗教の剽窃（ひょうせつ）教義** —— 主には世界の3大宗教である、仏教、キリスト教、イスラム教を引用しつつ（パクりつつ）、その後の内容を改竄（かいざん）するというものです。

この（2）の方法は、なかなかずるい・・いや、うまいやり方なのです。上記（1）のようなオリジナルの教義を一から布教するのは、結構大変な作業です。それなら、超有名どころの宗教をパクって、部分変更してやれば、随分とラクできます。

そして、この剽窃（ひょうせつ）型の落とし所は、決まっています。

―― 私が、最終メシア（メシア the final）である

と、言い張る奴が教祖になることです。

キリスト教を剽窃する宗教団体は、世界中に山のようにありますが、カトリックもプロテスタントも、そのようなカルト宗教団体を、キリスト教であるとは認めていないようです。それもそのはずです。ほとんどのキリスト教系のカルト宗教団体の教義は、**聖書の内容を『豪快に踏み躙る（ふみにじる）』内容になっている**からです。

私は、『これら多くのキリスト教系カルト宗教団体の教義は、新型コロナウイルス感染症のパラダイムで把握できる』、と考えました。以下、私の案出したパラダイムを使って説明したいと思います。

キリスト教系カルト宗教団体の教義は、コロナのパラダイムで把握できる

旧約聖書には『失楽園』の話が登場します。ヘビにそそのかされたアダムとイブが、神の禁を破って「善悪の知識の木」の実である「禁断の果実（リンゴ）」を食べ、最終的にエデンの園を追放されるというものです。

人類最古のカップルが、神の命令に背くことで、そのカップルから生まれた子孫である全人類がその罪（原罪）を負わされるという、（アダムやイヴと一度も面識もない私たちにとっては）非常に理不尽な話です。『アダムとイヴが何をやろうと、何でそれが私に関わってくるんだ？』と ―― 正直、私もそう思います。

この失楽園の話は、不当な裁判の結果、イエス・キリストがゴルゴダの丘で十字架にかけられ、全人類の原罪の罪を代行することによって、人類は、この原罪が許される、というストーリーとして完結します。

私にはよく分かりませんが、これがキリスト教を信仰する非常に重要な意義になっているようです ―― **私には、ただのマッチポンプ（勝手に事件を起こして、勝手に事件を解決すること）にしか思えませんが** ―― とにかく、キリスト教にとって、この"原罪"の話は、教義の根幹に関わる重要なストーリーなのです。

ともあれ、アダムとイヴのやらかした「リンゴ食」によって、私たちは生まれながらに、"原罪"というウイルスに感染して生まれてくる ―― という話になっています。

さてここで、イエス・キリストを「信仰する」という ―― この行為を、『イエス・キリスト製ワクチンを接種する』というパラダイムで考えてみたいと思います ―― イエス・キリスト製のワクチン接種によって、このウイルス（原罪）が消えてなくなるからです。

私は、2000年前のゴルゴダの丘の処刑によって、ウイルス（原罪）が天然痘と同じように、完全撲滅されたと思っていたのですが、その理解は間違っていました。つまり、「イエス・キリス

ト製ワクチンの接種（=キリスト教への信仰）」を実施しないと、ウイルス（原罪）で、人間はいつまでも苦しみ続ける、ということになっています —— 厄介で面倒で迷惑な話です。

私（江端）がカルト宗教（江端教）の教祖になった件

　さて、キリスト教系のカルト宗教団体の多くは、キリスト教の根幹とも言える、この"原罪"ストーリーに、壮大なラクガキ・・・もとい、上書きを施します。これらのカルト宗教に見られる「上書き」パターンには以下のようなものがあります（というか、私が知る限り、『これしかない』という感じです）。

　カルト宗教団体や、その教祖のイメージをしやすくするために、『**私（江端）がカルト宗教（江端教）の教祖になった件**』、という架空の話で説明を行います。

　まず、教祖である私は、原作である失楽園での、「アダムとイブによるリンゴ食」のストーリーを、ヘビ（ルシファー）とイブの性交（SEX）と、さらに、イブとアダムとの性交（SEX）という、「ヘビとアダムとイヴの3P（Three persons SEX）」が実施された、という「上書き」を施します。これによって、精神的または肉体的な純潔が犯された（堕落した）という概念を挿入しました。

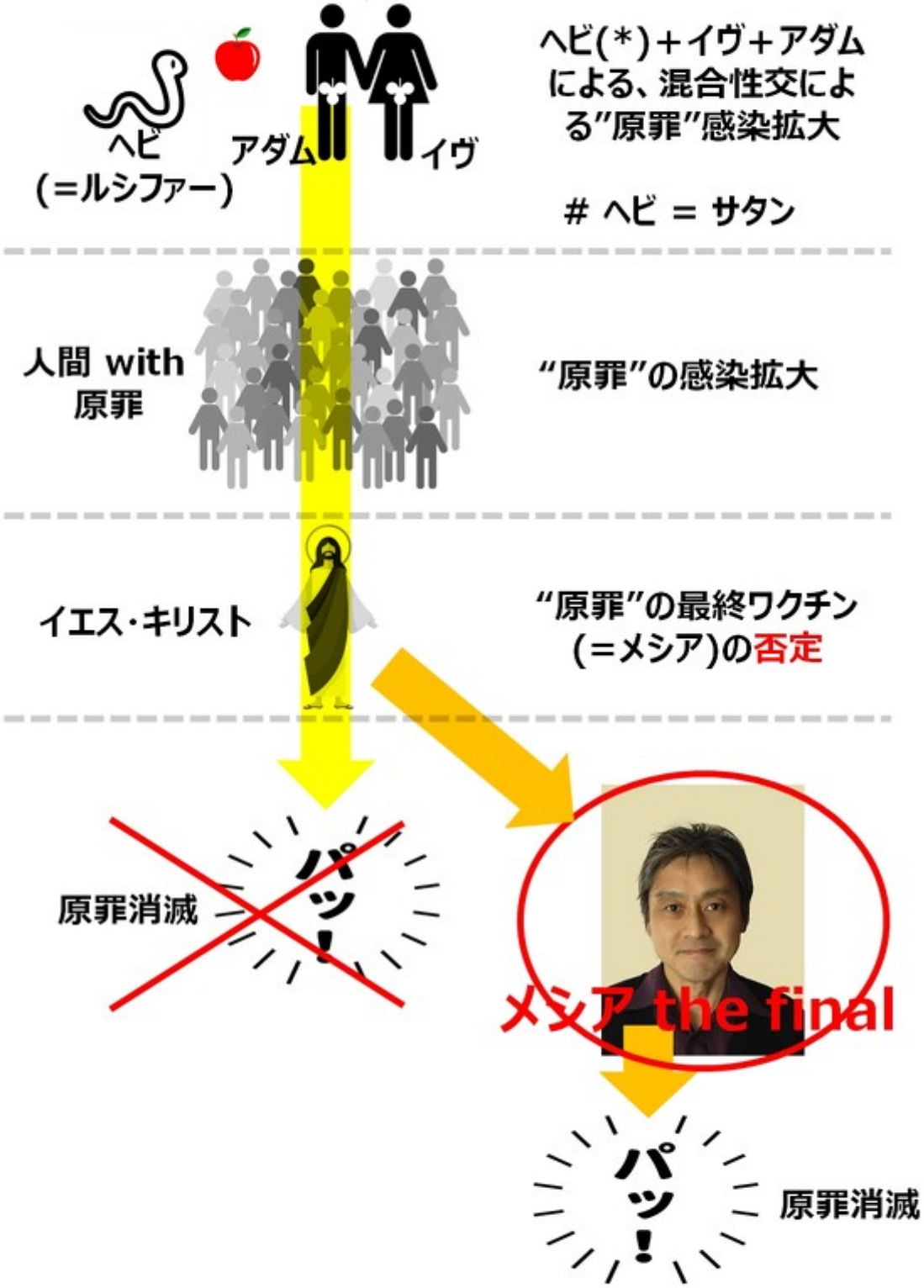
　次に、私は、『イエス・キリストの救済は、万能ではなかった』、という「上書き」を加えます —— といっても、イエス・キリストの働きを全面的に否定するのではなく、精神的または肉体的な純潔という2つの純潔のうち、**「精神面」だけは解決してくれた**、というストーリーに改ざんします。

　イエス・キリストを全面否定すると、信者が集まりにくくなると考えたので、ここは、イエス・キリストを活用する方向でストーリーを作りました。

　しかし、**肉体的な純潔は、まだ回復されていない**、という課題を残しつつ、ついに、ここに私（江端）が登場するのです。

「江端教」の独自かつ斬新な解釈(1)

「失楽園=コロナ感染」と「イエス・キリスト≠メシア the final」と把握する



イエス・キリストは、最終ワクチン足りえず、私(江端)こそが、"原罪"の最終ワクチン

"メシア the final" こそが、この私江端智一、偉大なる江端、『エバ・カンターレ』です。

以上をまとめますと —— イエス・キリスト製ワクチンは、”魂（スピリッツ）の原罪”には効果はあったが、**肉体（フィジカル）の原罪には、その効力が及んでいない**、という、**壮大なシナリオ変更をぶっこむ**のです。この肉体版”原罪”のワクチンとなるのが、この私、エバ・カンターレなのです。

私（江端）は、『**イエス・キリストは完全な”原罪”ウイルス向けワクチンを提供していない**』と、キリスト教に対する強烈なディスリスペクトをかました上で、**自分（江端）こそが最終救済者（メシア the final）であると言い切ります**。もちろん、これは、世界中のキリスト教徒全てにケンカを売る行為です＊）。

＊）ただ、世界中のカルトの教祖のほぼ全てが、「自分こそが”メシアthe final”」と主張しているので、逆に、「ありふれている」と言えるかもしれませんが。

「江端教」の独自かつ斬新な解釈(2)

イエス・キリストが、”原罪”の最終ワクチンではない

	解釈
#1	ヘビとイヴが交わって、イヴが”原罪”感染 → さらにイヴとアダムが交わって、アダムも感染 → 全人類、”原罪”の”集団感染”状態
#2	イエス・キリストによって救済されたのは”霊(スピリット)”だけ。肉体は、原罪も、”原罪感染”が続行中
#3	メシアの再臨(“メシア the final”)によって、肉体の方も救済する → それ誰？ → 私(江端)だ！

「イエス・キリスト ＝ メシア(救世主)」の豪快な否定

江端教の目的が、肉体向け”原罪”に対抗するワクチン接種行為と考えるわけです。

しかし、肉体向け"原罪"の消滅は、mRNAのようなワクチン接種では実現できません。そこで、私は、AI技術の一つである、遺伝的アルゴリズム＊）のアプローチ、すなわち、人為的なエリート製造戦略で、この問題の解決を試みます。

＊関連記事：「抹殺する人工知能 ～ 生存競争と自然淘汰で、最適解にたどりつく」

つまり、**肉体向け”原罪”をうまいこと消滅できる組み合わせのカップルを作る**のです。『そんなこと、どうやってできるのか』などとは、考えてはなりません。

私はたった一人で、誰にも相談せずに、この組み合わせをコンピュータと直感でデザインするのです。しかし、1組、2組程度をちんたらやっていたら、人類の救済などできません。

ですので、カップルを、数千から数万単位で同時に量産するのです。その上、私は、男女の顔写真と全身写真”だけ”で、ニューラルネットワークと、最適化アルゴリズムを使ってマッチングさせます。

私はコンピュータを使った組み合わせ問題のエキスパートでもありますので、この問題の困難性を完璧に理解しています。恐らく、完璧な量子コンピュータが開発されたとしても、この組み合わせを完成させるのには、宇宙の年齢を、宇宙の年齢分繰り返しても、全然足りないくらいの時間が必要です＊）。

＊）「NP困難問題」でググってみてください。

しかし、忘れてなりません。私は、最終救済者、”メシア the final”なのです。**私のコンピュータの中には、神が常駐しており、私には、計算中のコンピュータから、常に神の声が聞こえてくるのです**。

このように、この私は、肉体版”原罪”を消滅させうる超高度な医学的（遺伝子学）組み合わせを、写真だけを使って、膨大（という言葉では語れないくらいの膨大）な数でデザインします。

この程度のこと、”メシア the final”である私にとっては、ピース・オブ・ケーキ（朝飯前）です。

人類は、最終救済のためであれば、自由恋愛やら、出会いの場やら、合コンやら、結婚相談所やら、そのような些事（さじ）に関わっている暇はありません。

神の声を聞くことのできる唯一のメシアである私は、堕落した近代の**自由恋愛結婚観を完全否定**して、現実世界において、豪快かつ壮大な数の遺伝的アルゴリズムを地上で実現しなければならないという使命があるのです —— つまり、一斉集団結婚です＊）。

＊）純潔を守るという名目の、「村の中のみで閉じた結婚制度」、あるいは、「一夫多妻」「一妻多夫」などのような形態でも同じ効果を得られます。

すなわち、江端教においては、肉体版"原罪"を消滅させうる手段として、一斉集団結婚は、絶対に避けて通ることができない一大イベントなのです。

「江端原理」通称”エバタ・プリンシプル”を説明する

では次に、江端教の教義（**「江端原理」通称”エバタ・プリンシプル”**）について説明します。エバタ・プリンシプルは「オブジェクト論」「堕落論」「再構築論」の3つから構成されています。

つまり、

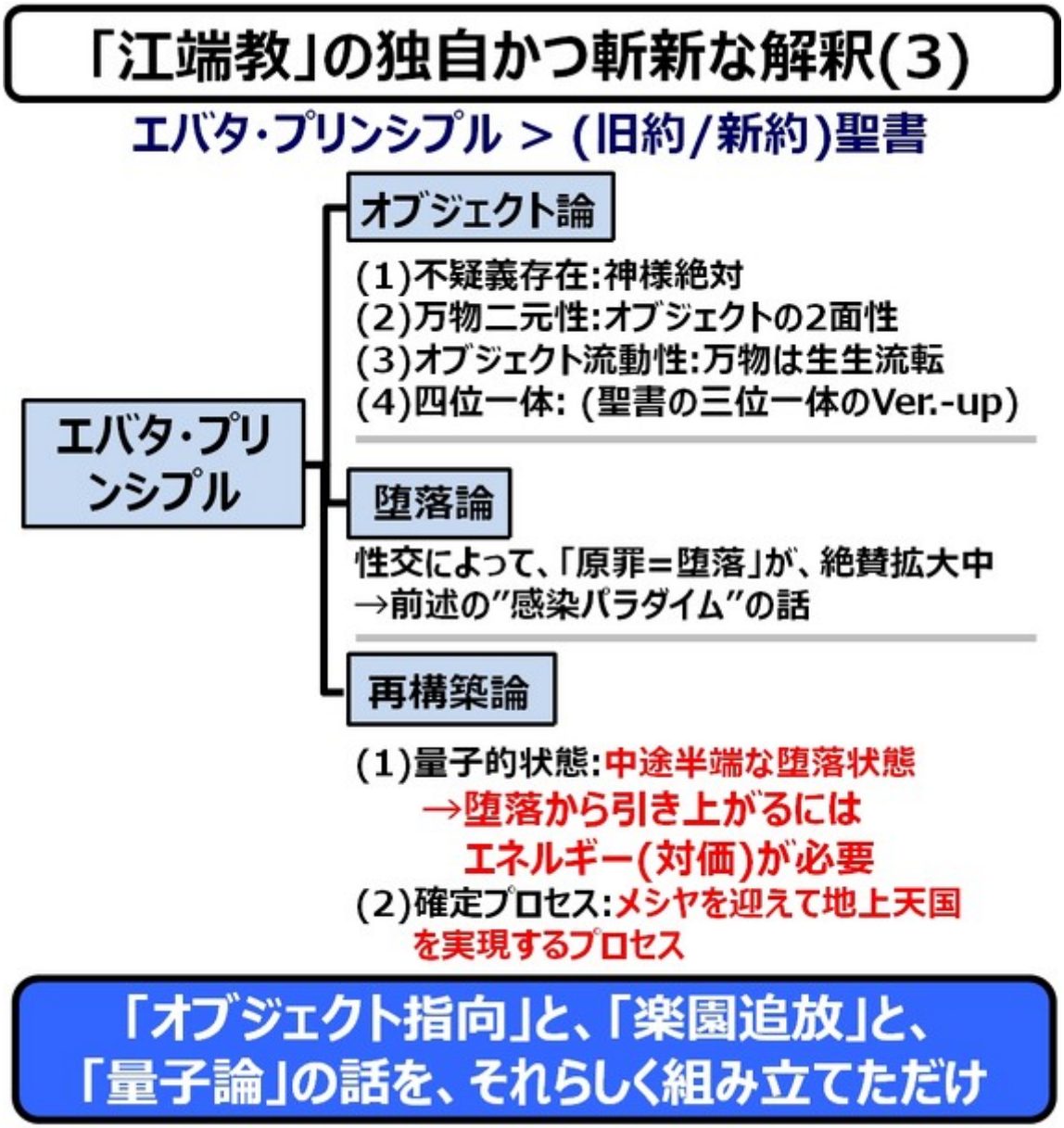
（Step.1）世界とはどういう風にできているのか（世界を構成するオブジェクトとメソッド）
（Step.2）世界はどのように壊れたか（堕落したか）
（Step.3）世界をどのように修復するか（再構築するか）

です。

ちなみに、剽窃（ひょうせつ）系カルト宗教の教義は、ハンコ（あるいは金太郎あめ）のごとくこのような教義の形式を取っています —— というか、カルト宗教の教祖の多くは、オリジナリティーを考え出すだけの”知力”が足りない気がします。

大原則として、聖書の内容と、エバタ・プリンシプルの内容に矛盾が生じた場合には、エバタ・プリンシプルの解釈が優先されます＊）。なぜなら、私こそが、"メシア the final"だからです。私より前に登場したメシアの言葉など、無視して当然です。

＊）「原理主義」と言えば、タリバンやイスラム過激派など、経典絶対主義のようなイメージですが、キリスト教系のカルト宗教の多くは、ほぼ例外なく、聖書の内容を踏みにじっています。



「**オブジェクト論**」とは、世界の現象をオブジェクトモデルにオブジェクトの運動のメソッドを加えて、オブジェクト間の相関を説明したもので、ここに聖書の話を随所につっこんで完成させたものです。

ちなみに、もし私が、本気で、この”エバタ・プリンシプル”を完成させるのであれば、テクニカルライティングの観点から図表を濫用すると思います。今回、参考としたカルト宗教団体の教

本は、本当に読みにくかったです。文章も下手な上に、ろくな図面も出てこないずさんなものでした —— まず、**教祖となる人物は、文章の書き方から訓練してほしい**ものです。

私なら、UML（Unified Modeling Language）などを使い倒します。江端教は、エンジニアにも布教する予定ですので、このような教義書は、役に立つし、一般の方はもちろん、知的エリートも引きつけやすくなると思えます。

ところで、意外な感じがするのですが、カルト宗教団体には高学歴者の信者が多いです。私には、この理由がなんとなく分かります。エリートたちは筋の通ったロジックに、恐ろしく弱いのですよ。『え？そんなことも、分からないの？』と挑発するだけで、彼らは簡単に転びます。チョロいです。詳しくは、「抹殺する人工知能 ～ 生存競争と自然淘汰で、最適解にたどりつく」の、「**よく分かんないけど、嫌なものは嫌なの!!**」と言えない研究者たちの話をご一読ください。

では、次に「堕落論」について説明します。既に説明しましたが、「ヘビとアダムとイヴの3P（Three persons SEX）」による、純潔からの堕落の話です。

江端教は純潔な夫婦を規範とします。この教義から言えば、前述した「ヘビとアダムとイヴの3P」は堕落の極みといえるものであり、解決すべき最優先の検討課題です —— まあ、アダムイヴの子孫とされている（？）私たちは、『先祖のことなんぞ、知ったことか』と思うかもしれませんが、そこはそれ、これは「宗教」ですから。

最期に、「**再構築論**」になります。江端教の教義”エバタ・プリンシプル”で、最もバラエティに富んでいるのが、この「再構築論」です。

これは、聖書で言うところの「イエス・キリストを信仰することによって、全ての原罪から開放される」という話に似ているのですが、この「再構築論」では、原作（聖書）にはない、かなり面白いパラダイムを登場さえていきます。その一つが「量子的状態」です。

前述した通り、人間の”魂”の原罪ウイルスは、イエス・キリスト製ワクチンによって対応済みなのですが、”肉体”の方の原罪は、まだ”不純”状態が続いています。つまり、私たち人間は、不完全な”原罪”解消状態でフラフラしている、という状況です＊）。

＊）関連記事：「もはや怪談、「量子コンピュータ」は分からなくて構わない」

ここまでの「再構築論」の話をまとめると、こうなります。

（1）われわれは中途半端な”原罪”を背負った状態にある
（2）この”原罪”をチャラにするには、対価が必要だ

このフラフラ状態を、完全かつ安定な状態にする ——つまり「借金をチャラにする、免除する」という考え方を登場させて、**借金をチャラにするなら、その対価（あるいは代替物）が必要だ**、というロジックを導出します。

では、その”原罪”の原因になっている”ブツ”とは何か？ それは人間を堕落させている決定的なもの、「**金（カネ）**」です。「金（カネ）」が悪いのです。その「金（カネ）」を取り上げて、良いものに替えてやる（代替させる）ことが、絶対的な正義であり、神の御心に沿うことです。

　では、その代替品は何か。**”壺”、”数珠”、”経書”、”高麗人参”は、江端教には似（そぐ）いません。**

　江端教では、江端が構築したクラウドサーバのアカウントや、ラズベリーパイを、信者のみに提供します。これらは、神の計算から導かれる過去と未来『アカシックレコード』を、あなたにだけに見せるものです。

　しかも、1アカウント、または、1台あたり、100万円～1000万円程度の破格の安価です（ここでは、これを「アカウント商法」ということにします）。

　この**ありがたいアカウント**を使ったログインによって、人類はアカシックレコードにアクセスすることが可能となり、原罪の原因である、最悪の要因である「お金」を、できるだけたくさん取り除くことができるのです。これは、江端教信者の崇高な義務の一つです。

　あれ？ じゃあ江端教の教団は、原罪の原因である「お金」が集まってきて、困るのではないのか？と思いますよね。ところが、どっこい、大丈夫なのです。

　偉大なるエバ・カンターレ、そして、”メシア the final”である私は、それらの不浄のお金を、浄化した上で、教団の運営に使うからです。偉大なる教祖であり、神に最も近い存在である私は、いわば「**神のマネーロンダリングマシン**」です。あなたたちと私は”格”が違うのです（私（江端）は”神格”です）。

　以上、（とあるカルト宗教の経典を参考にして）私が作り出した「オブジェクト論」「堕落論」「再構築論」の3つをざっくりと説明しました。

　この”エバタ・プリンシプル”を読めば、江端教においては、「一斉集団結婚」も、「アカウント商法」も、（信者にとっては）非常に極めて合理的かつ、筋の通った活動になることがお分かりいただけると思います。

これは「神様のマネジメント能力の欠如」では？

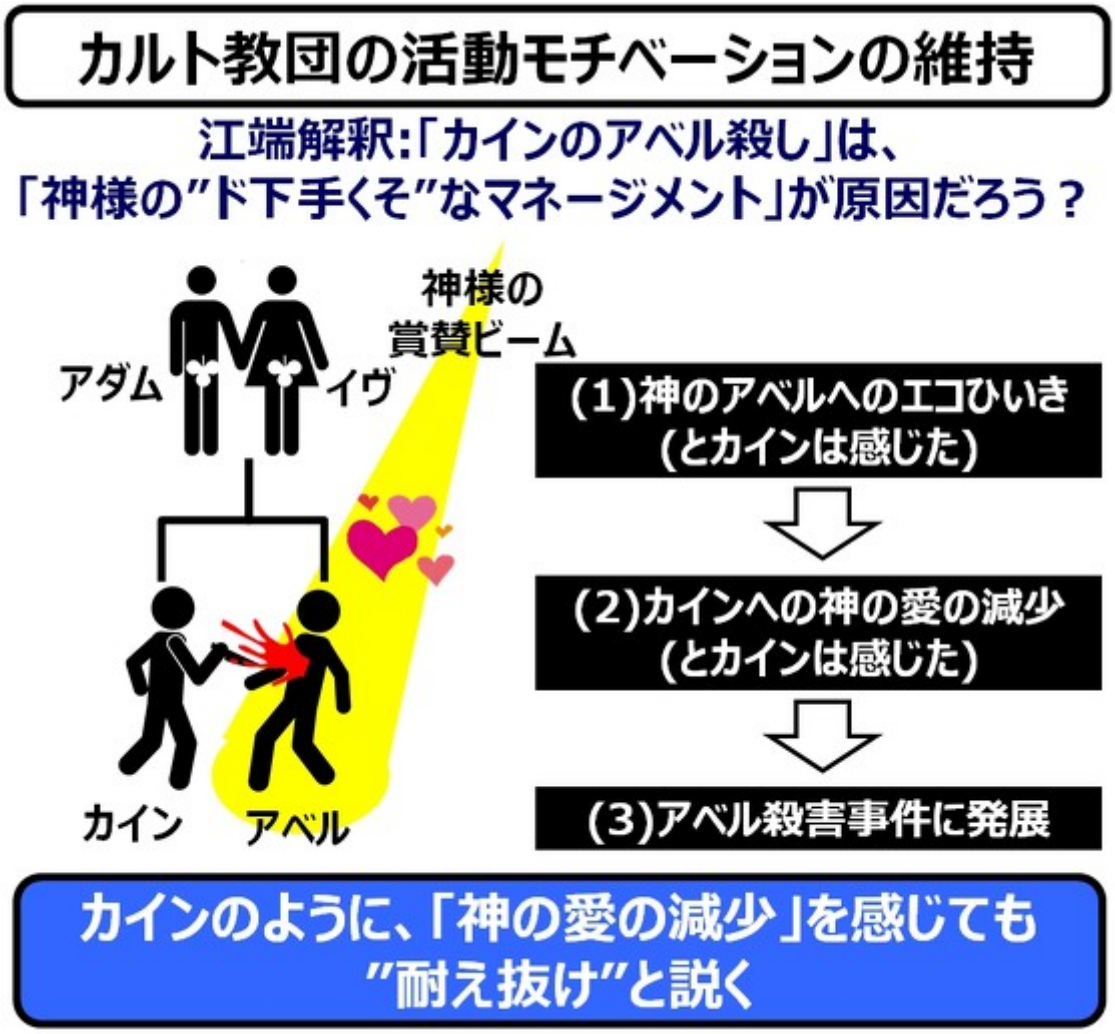
　さて、旧約聖書には、世界最古の兄弟げんかであって、殺人事件に至ってしまった「カインのアベル殺し」の話が登場します。事件の概要は、以下の通りです。

（1）ある日2人はそれぞれの収穫物を神様にささげた。カインは収穫物を、アベルは肥えた羊の初子をささげた

（2）ところが、神様はアベルの供物に目を留めカインの供物は目を留めなかった

（3）ふてくされたカインは、アベルを野に誘い出し殺害する

（4）その後、神様からアベルの所在を尋ねられたカインは、神様に向かって『私の知ったことか』と言い放つ



この話については、「カインの礼儀がなっていなかった」とか「カインの収穫に至るプロセスに問題があった」など各種の解釈があるようです。私、実際に聖書を読んでみたことがあるのですが、『**これ、どう考えたって、神様のマネジメント能力の欠如じゃないか**』と思いました。クラスのガバナンスすらできない学校の教師を見るような能力の低さを感じました。

まあ、それにしても、アダムとイヴも、その子どものカインもアベルも、まったくこの家族ときたら、「喰うなと言われるもの（リンゴ）を喰い」「嫉妬で、簡単に弟を殺害する」という、目も当てられないほどの崩壊家庭です —— この先祖にして、今の私たちあり、と納得できます。

私、これまで、『カルト宗教団体に所属していて、今は脱会している人の手記』を数多く読んできたのですが、その手記の中に**「カインのアベル殺し」の話が頻繁に登場してくる**ことに気が付きました。

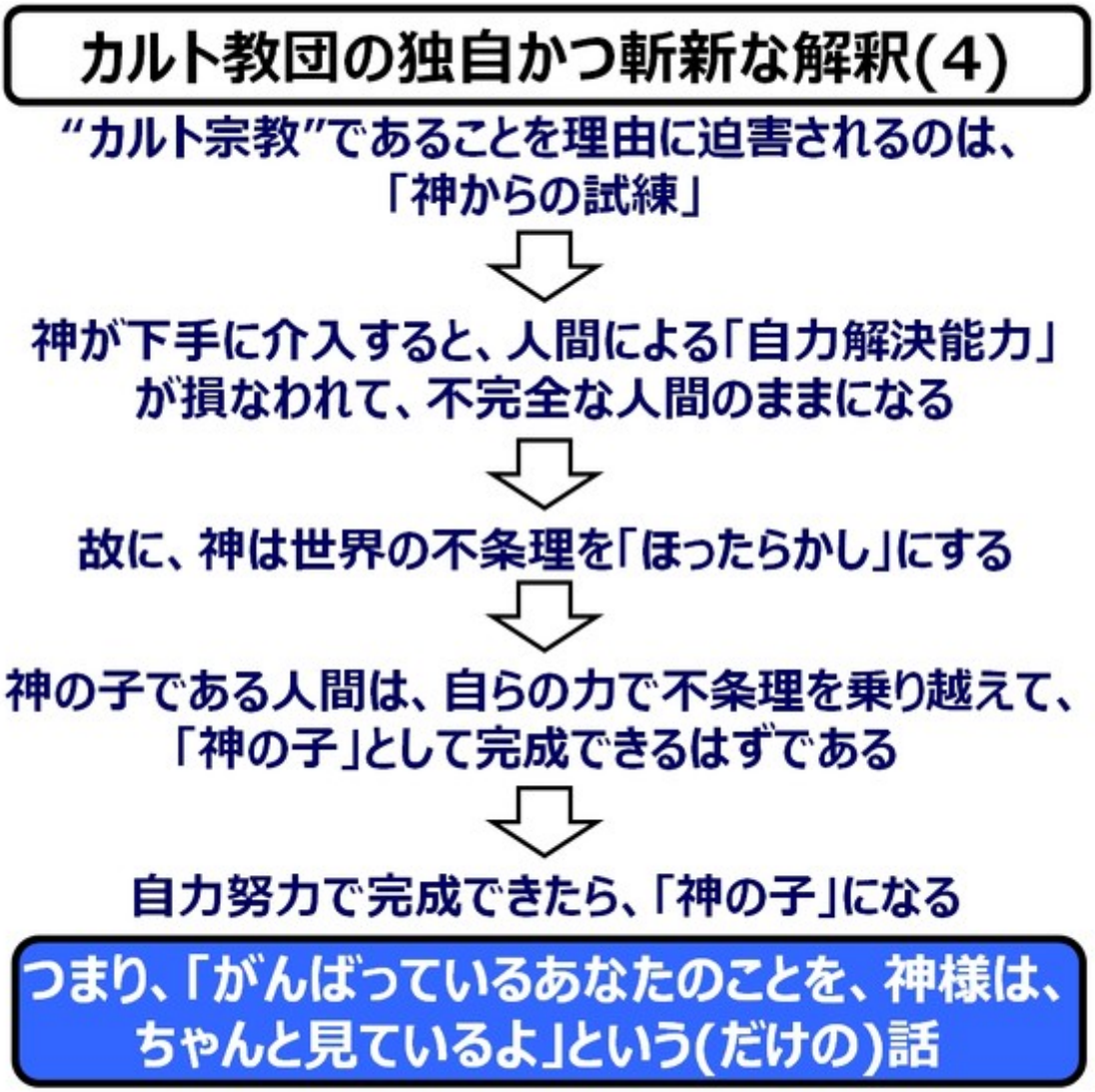
そもそも、"つぼ"、"数珠"、"経書"、"高麗人参"を売りつける作業（修行？）は、普通に考えたって、楽しいものでないことは容易に想像できます。しかし、教団では、その売上額によって、教団への貢献度が評価される、らしいのです—— つまり、普通の会社のノルマと同じです。

つまり、信者とは、セールスマンであって、話術の長けた、魅力的な話や、あるいは、えげつない話を平気で語ることのできる —— **先立たれた子どもや伴侶が「地獄で苦しんでいる」などの話で、恐怖と恫喝（どうかつ）で商品を売りつけることのできる** —— 信者が、信仰心の厚い信者として、教団内で出世していくわけです。

当然、カルト宗教団体の中でも、そういうことに長けていない人はいます。ノルマ未達で、叱責をされて、ふてくされる信者も出てくるそうです、『**私はしょせん”カイン”であって、神様から愛されていないのです**』とつぶやいて。

まあ、普通の会社なら、辞表をたたき付けて転職する、というアプローチが取れますが、『カルト宗教団体からの転宗』というのは、どういうものなのか分かりませんが、難しそうです。

カルト宗教団体では、この「カインのアベル殺し」のストーリーを使って、うまいこと信者を口説いているらしいです。つまり、いまくいかない信者は「神からの試練を受けている」というパラダイムに転換する訳です。つまり、「**うまくいかないのは、神様に愛されているから」というロジック**です。



まあ、これ、別に目新しいロジックではありません —— 「お前を愛しているからこそ殴ってしまうのだ」とか言うDV夫や、「**江端君はもっと上を目指せるからこそ厳しくしているのだ**」と言い放つ上司と、別段変わるところはありません —— はっきり言って、私なら**バカ言ってんじゃねーぞ**と思いますが、カルト宗教団体の信者は、これをかなり真面目に受けとめているらしいです。

私は、カルト宗教団体の信者の人全部を知っている訳ではないのですが、手記を読んでいると、カルト宗教団体の信者は”人がいいなぁ”と思います。”素直”と言えば聞こえは言いですが”愚直”であるとも言えます。信者にとっては、宗教にとって教義は絶対ですし、加えて、カルト宗教

団体の「教義」は、それなりに良くできている『物理学の教科書』のようで、反論しにくい内容になっていることも一因かもしれません。

「神からの試練を受けている」と言われれば、信者は、その言葉に逆らうことはできません。「**そんな神様、いらんわ**」と言える人間なら、そもそもカルト宗教団体に入会するハズがないです（筆者のブログ）。それに、教団内では、結構えげつないマインドコントロールもあるようです（今回は言及しませんが）。

ある集団に属することになれば、誰であれ、必ずその集団の常識に染まります。それは、カルト宗教団体でも、学校でも、町内会でも、企業でも同じです —— 問題は、**そのマインドコンロールの内容が、社会的に認容される範囲内にあるかどうか**の、一点です。

「霊感商法」

さて、最後にカルト宗教団体のビジネスモデルである「霊感商法」に関してお話したいと思います。

以下の説明は、WikiPediaの丸パクリです。

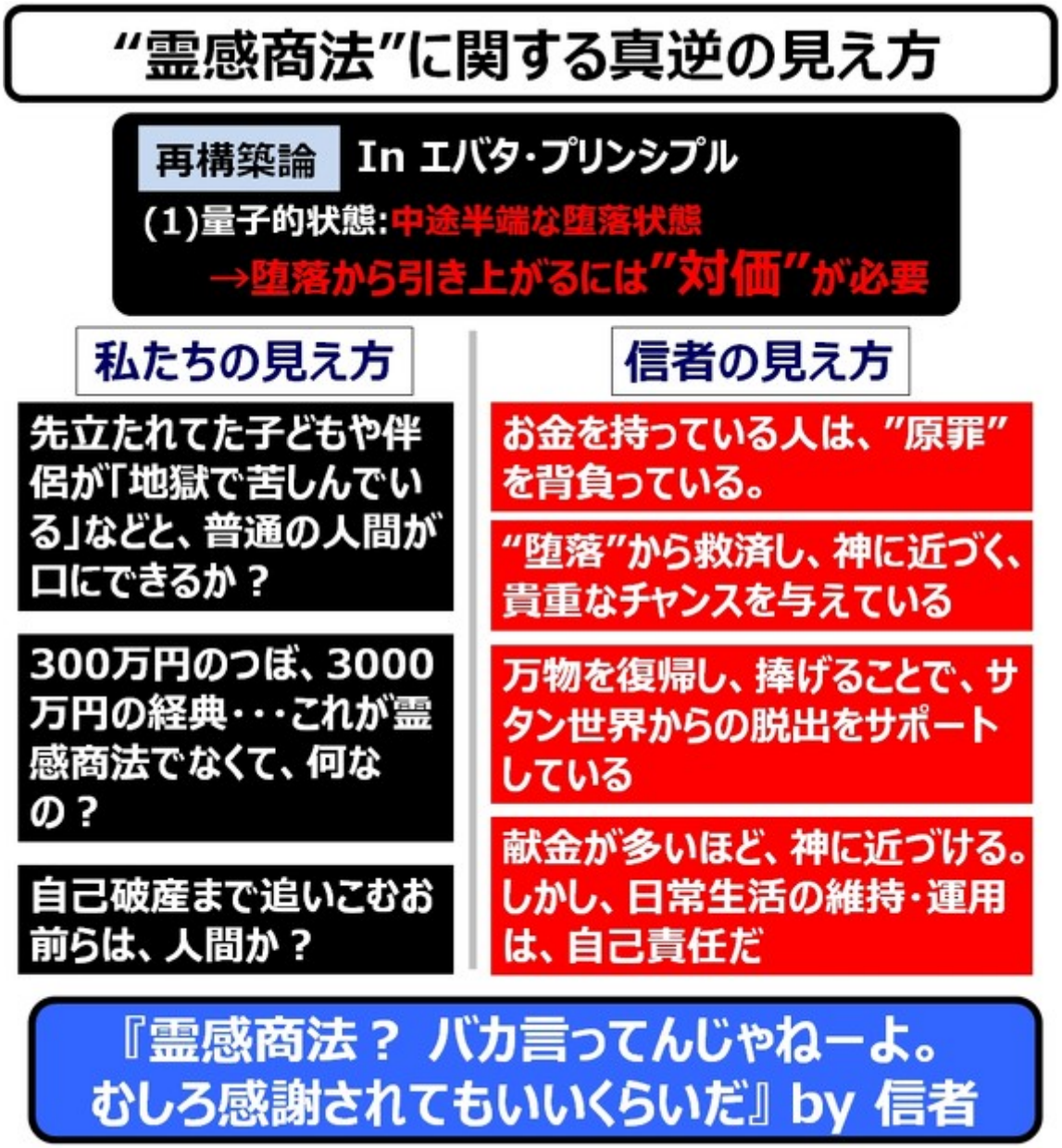
霊感商法とは、霊感があるかのように振る舞って、先祖の因縁や霊のたたり、悪いカルマがあるなどの話を用いて不安を煽（あお）り、印鑑・数珠・多宝塔などを法外な値段で商品を売ったり、不当に高額な金銭などを取る商法のことで、悪徳商法の一種です。

人の不幸を巧妙に聞き出し、霊能者を装った売り手が、その不幸を先祖のたたりなどの因縁話で説明する。そして「この商品を買えば祖先のたたりは消滅する」と効能を訴えたり、「このままだともっと悪いことが起きる」などと不安を煽り、相手の弱みにつけこんで、法外な値段で商品を売りつけます。

扱われる商品としては、主に壺や多宝塔の美術品を始め、印鑑、数珠（念珠）、表札、水晶などがあります。

しかし、どのカルト宗教団体も、一貫して「霊感商法」を否定しています。当然です。彼らは、「霊感商法」などという、いかがわしいことは一切やっているつもりはないからです。

彼らがやっていることは、「**原罪を持つ人類への、崇高なる救済活動**」なのです。



上記のように、「私たちの見え方」と「カルト宗教団体の信者の見え方」は全く違うのです —— 真逆です。私たちは、霊感商法をしかけるカルト宗教団体の信者を人間のクズや悪魔のように見なしますし、他方、カルト宗教団体の信者たちは、私たちを「生まれながらのサタン（=肉体的”原罪”を負う者）」と決めつけているのです。

カルト宗教団体の信者たちは、通常の人間には絶対に実施不可能な、「サタン！去ね！」という奇跡サービスを実施しているのに、なぜ世間様から責められなければならないのかが、分かりません。

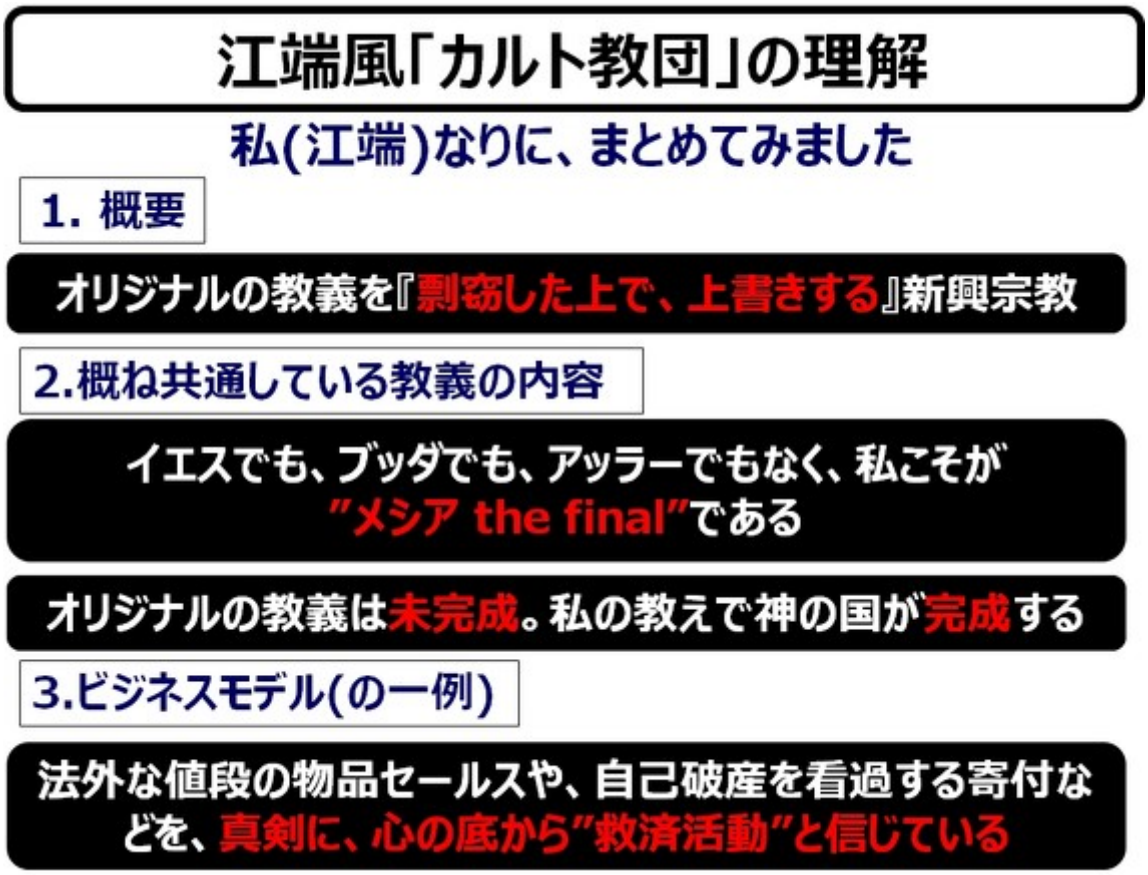
しかし、『**本当に分からないのか？ 嘘だろ？ 分かるだろう、そのくらいのこと**』と —— どの時代のどの世界であっても、その時代に応じた社会通念があり、その時代と世界において、**逸脱してはならない一線**があります。

少なくとも、現在のわが国においては、子どもや伴侶に先立たれた人間に、『地獄で苦しんでいる』などと言っていいような社会常識は存在しないし、自己破産の概念もないような人間からの寄付があれば、それを止（とど）めるのが人間としてのモラルです —— **そんなことは、難しい経典を読み込んで、必死に勉強しなくても、自分の頭だけで簡単にたどりつくことができるはず**です。

なぜ、それができないのか？　自分の頭だけでたどりつける思考回路が、他人によって破壊されているからです。それを、一般的に「**洗脳**」と言いますし、もし壊されていないのに実施しているのであれば、それは「**思考放棄**」という自己否定です ―― が、そんなことを言ってみたところで、詮無い（せんない）ことも、私は分かっています。

なぜなら、宗教の完成形は、信者の「洗脳」であり「思考放棄」だからです。

最後に、私なりの、カルト宗教団体のまとめをしてみたいと思います。



冒頭で、私は、カルトを次のように定義しました。

（1）反社会的、違法、または、社会通念上の常識に著しく反する信条を持ち、
（2）上記（1）を信仰という手段で実施する団体（宗教団体）、またはその構成員（信者）

聖書の内容を踏みにじることや、"原罪"論の拡張は、信条の自由ですし、聖書の二次創作ですので、問題ありません＊）。

＊）信者にとっては、異教徒として殺りくしたい気持ちになるくらいの問題かもしれませんが。

自由恋愛結婚を否定する「共同結婚式」、ほとんど近親婚となり遺伝的に危険な「クローズドコミュニティー内での結婚の繰り返し」、または「一夫多妻」「一妻多夫」などは、近代社会通念上の常識に反すると言えるかもしれませんが、これも、ぶっちゃければ「個人の勝手」です。

そもそも、カルトであろうがなかろうが、いかなる宗教団体への入会も、**信教の自由（憲法第20条）で認めている国民の基本的権利**です。

しかし、心理的恐喝による法外な値段の物品セールスや、自己破産を看過する寄付などの「霊感商法」は、明らかに非人道的かつ反社会的です。そして、現時点においては、違法行為になっています（平成30年、消費者契約法第4条3項6号）。

３　消費者は、事業者が消費者契約の締結について勧誘をするに際し、当該消費者に対して次に掲げる行為をしたことにより困惑し、それによって当該消費者契約の申込み又はその承諾の意思表示をしたときは、**これを取り消すことができる**

六　当該消費者に対し、**（A）霊感その他の合理的に実証することが困難な特別な能力**による知見として、そのままでは当該消費者に**（B）重大な不利益を与える事態が生ずる旨を示してその不安をあおり**、当該消費者契約を締結することにより**（C）確実にその重大な不利益を回避することができる旨を告げる**こと。

というか、この法律は、かつてのカルト宗教団体が引き起した大量の金銭トラブル事件によって、制定されたものです。

この法律が制定された平成30年とは、**2018年、つまりたったの4年前**です。私がこの問題を知っていたのは1985年くらいですから、私の知る限り、この霊感商法は、**最低でも33年間は放置され続けていた**、ということです（宗教法人の認可を受けた1964年から起算すると、**54年間**にもなります）。

しかし、上記の法令を深く読んでみると分かるのですが、「（A）自分は霊が見える」といい、「（B）不安をあおり」「（C）『不利益を回避できる』旨を告げる」という、3要件がそろわなければ、霊感商法の契約取消（返金等）は成立しないのです。

つまり、「**自分の意思で自分名義の財産のカルト宗教団体に寄付をする**」、ということについては、この法律（第6号）は**発動しない**のです。その結果、自己破産しようが、家庭崩壊しようが、それは自己責任となり、カルト宗教団体には、法律上の返金の義務は発生しません。

加齢や病気による判断力が低下していることを知りながら、「生活が難しくなりますよ」と不安につけこむようなやり方であれば、消費者契約法第4条3項5号の適用がありえますが、**高齢でも病気でもなく通常の生活ができている人には、これも通用しません。**

総括します。

―― カルト宗教団体の運営は、（自分の全財産を自分の意思で差し出せるような）狂信的な信者を”作り出せる”か否かにかかっている

と、いうことです。

テーゼ：カルト宗教は私を助けてくれるのか

長い前半でした。ここから後半、本論に入ります。

ここまでは、いわゆるカルトと呼ばれている宗教団体の性格を俯瞰（ふかん）するために、「江端教」なるカルト宗教団体を作り出して考えてみましたが、宗教であれ、政治であれ、左翼であれ、右翼であれ、カルトの本質は同じです ―― **「洗脳」と「思考放棄」です。**

改めて、この連載の目的は、「お金に愛されないエンジニア」の自己救済方法です。そして、今回のテーゼは、「**カルト宗教は、リタイア後に無収入になる予定の私に、安全・安心な老後を提供してくれるか**」です。それが達成されるのであれば、私は、「洗脳」と「思考放棄」を受け入れる準備があります。

テーゼ:カルト宗教は私を助けてくれるか？

カルト教団や極左/極右の政治団体は、私に、安全・安心な老後を提供できるか？

観点	概要	疑問、その他
予想される「私の最期」	終末期には、ほぼ100%の確率で「寝たきり」になり、高い値段のかかる手術が必要になる	ちゃんと、入院・介護の面倒まで見てくれるのか？
	伴侶にも先立たれ(？)、苦痛と孤独で、この世の地獄の苦痛に遭う	私を納得させ得る、死後論で、気持ち良く葬送可能か？
私の財産	家でも土地でも、財産と名の付くものであれば、なんだって提供する準備がある	ただ、こんな連載をやっているくらいだぞ？
私の性格	ロジカルに説明して貰えないと、納得できない性格	上記の記載に、納得のできる回答を貰えることが必要
私の特性	信じていないことでも、平気で語れるくらいのプレゼン能力はある	教団窓口として役に立つ(多分)
	ただ、教団に都合の悪いことでも、うっかりコメントしてしまうことがある	たまに、舌禍を起すと思う
私の管理能力	人望は絶望的。だがパワハラ(大声で恫喝等)で、ノルマ達成に貢献することはできる(と思う)	但し、法に抵触しないやり方を検討したい

私の"最期"さえちゃんとしてくれるなら、信じていない教義だって、語ってみせよう

最大の懸案は、私の最期、終末期です。

どんな元気な人であったとしても終末期には、当然に"寝たきり"になります。現時点で、私たちが"寝たきり"になる期間は、男性で約10年間、女性は13年間です（関連記事：「高齢者介護 ～医療の進歩の代償なのか」）。

全ての財産を教団に投げ出して、事実上の破綻状態になっている私の最期（10年間）を、教団は面倒を見てくれるか、ということになります。

後先考えずに、教団への寄進を続ける私を、妻や娘が見捨てて、絶縁状態に至ることは、どう考えても自明です。

疑問2："寝たきり"は存在したのか

仮説："寝たきり"が存在したとしても、期間は短かった

■平均寿命 － 健康寿命 ＝ 約10年(男性)
約13年(女性)

仮説：(平均寿命 － 健康寿命) は、平均寿命に比例する

#	平均寿命	(平均寿命 - 健康寿命)
江戸時代	35歳	約4年(男性)
		約5年(女性)
縄文時代	15歳	約1.5年(男性)
		約2.3年(女性)

実際は、設備のなしの"寝たきり"は難しい

と同時に、全ての財産を投げうって教団に尽くす信者を、教団が保護するべきですし、**信者である私は、当然に、そのような保護を期待します**。

あとは、終末期のメンタルケアです。家族から見捨てられた私は、孤立無縁の孤独状態です。全ての宗教は、人々の心の救済が心の目的で、特に死の恐怖からの回避が、その最大の意義です。

うまいこと、私の心の安寧をキープして、心安らかな死に導いてくれるか —— というか、この私（江端）を納得させるだけの、説得力のある来世のビジョンを、きちんとプレゼンテーションしてくれるのか、が心配です。

さすがに「科学的な証拠を出せ」とまでは言いませんが、私程度の素人に、簡単に論破されるような軟弱なプレゼンテーションでは、困るのです。

一方、終末期直前までの私であれば、結構、教団の役に立つと思います。なにしろ、エンジニアであり研究員でもある私は、「**自分が信じていないことであっても、他人に信じさせる技術**」については、徹底的に訓練されているからです（学会発表とか、顧客プレゼンテーションとかで）。

ただ、管理者としての能力は、ダメダメだろうと思っています。何しろ私は、後進を育成するという気概に決定的に欠けているからです。そんな時間があれば、自分の好きな勉強をしていたい、というマインドが常に勝ります。

とはいえ、ちゃんと訓練してもらえれば、**大声で叱責することのできる、ほどよいパワハラを発動できる信者になる自信はあります**。なにしろ、これまで、そうやって、大声の怒号の応酬で、カルト宗教とのバトルを繰り返してきたという、輝かしい過去の実績があるからです。

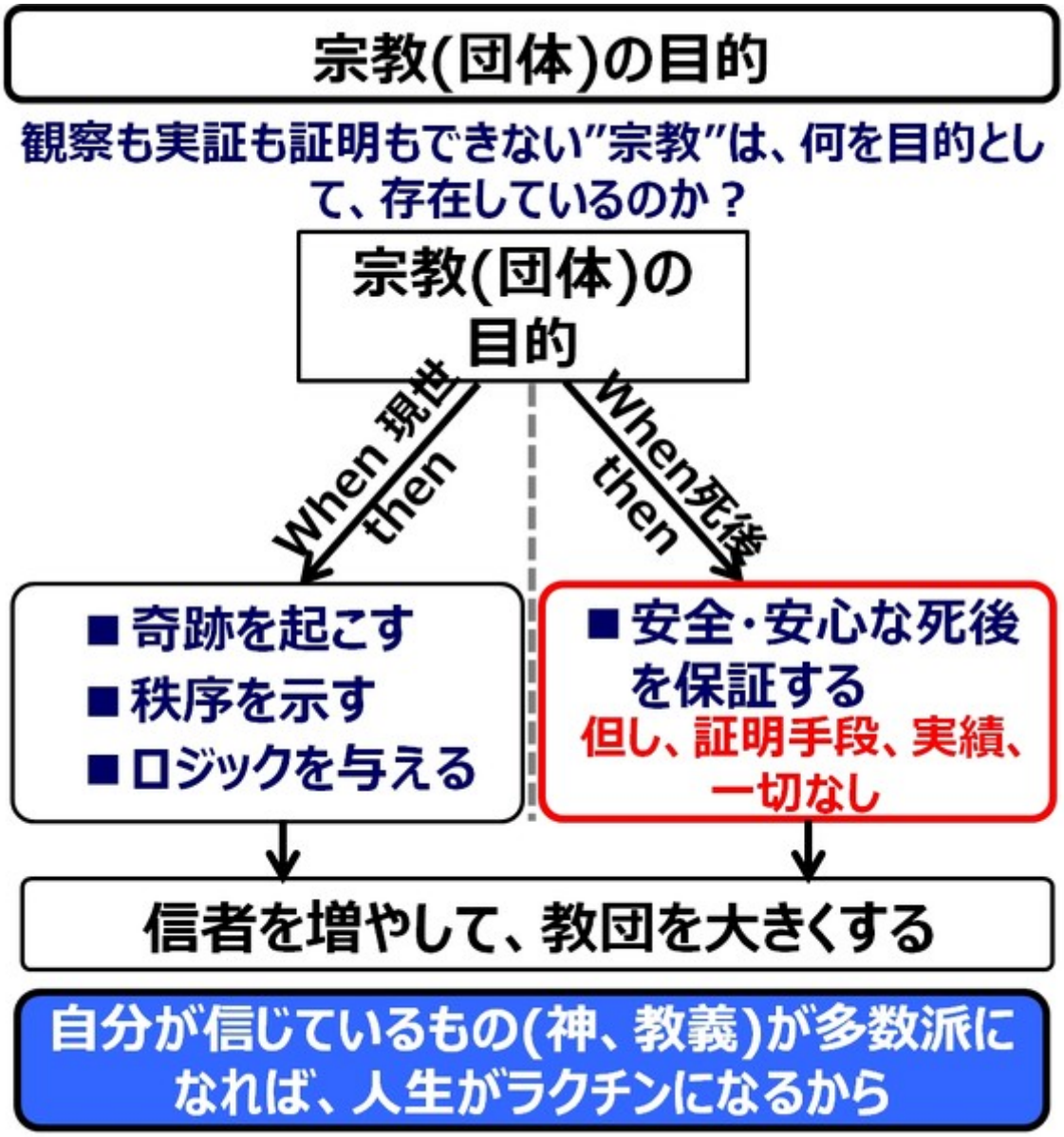
私は、きっとカルト宗教団体の発展・・・教団の外に向けては「布教」に、教団の内に向けては「洗脳」に、なかなか適した人材だと思うのですが、いかがでしょうか？

「パスカルの賭け」

「そもそも、宗教（団体）の目的って何？」という質問に、すぐに答えられる人は、少ないと思います。

しかし、宗教（団体）の目的は、非常に単純で明快です。**「増えること」「大きくなること」**、これに尽きます。生物の生存競争のルールと同じです。

宗教は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大や、実家の庭の雑草たちの領域拡大の闘い、あるいは、会社の派閥争いから、町内会や子ども会の内部対立などと、まったく同じロジックで機能しています。



なぜ、そのルールが発動するか、というと、**自分がラクできるから**です。自分と異なる存在と共存するのは、結構な努力や忍耐のエネルギーが必要ですが、同じような存在に取り囲まれていれば、ラクチンな世界ができるわけで、その世界は広ければ広いほど、ラクチンできる範囲も広がる、というわけです。

総じて、**相互理解というのは疲れるもの**です。『気心の知れた仲間』とは、相互理解の面倒くさいプロセスで、『手を抜きたい怠けものの集団』と定義しても、全く問題ありません。

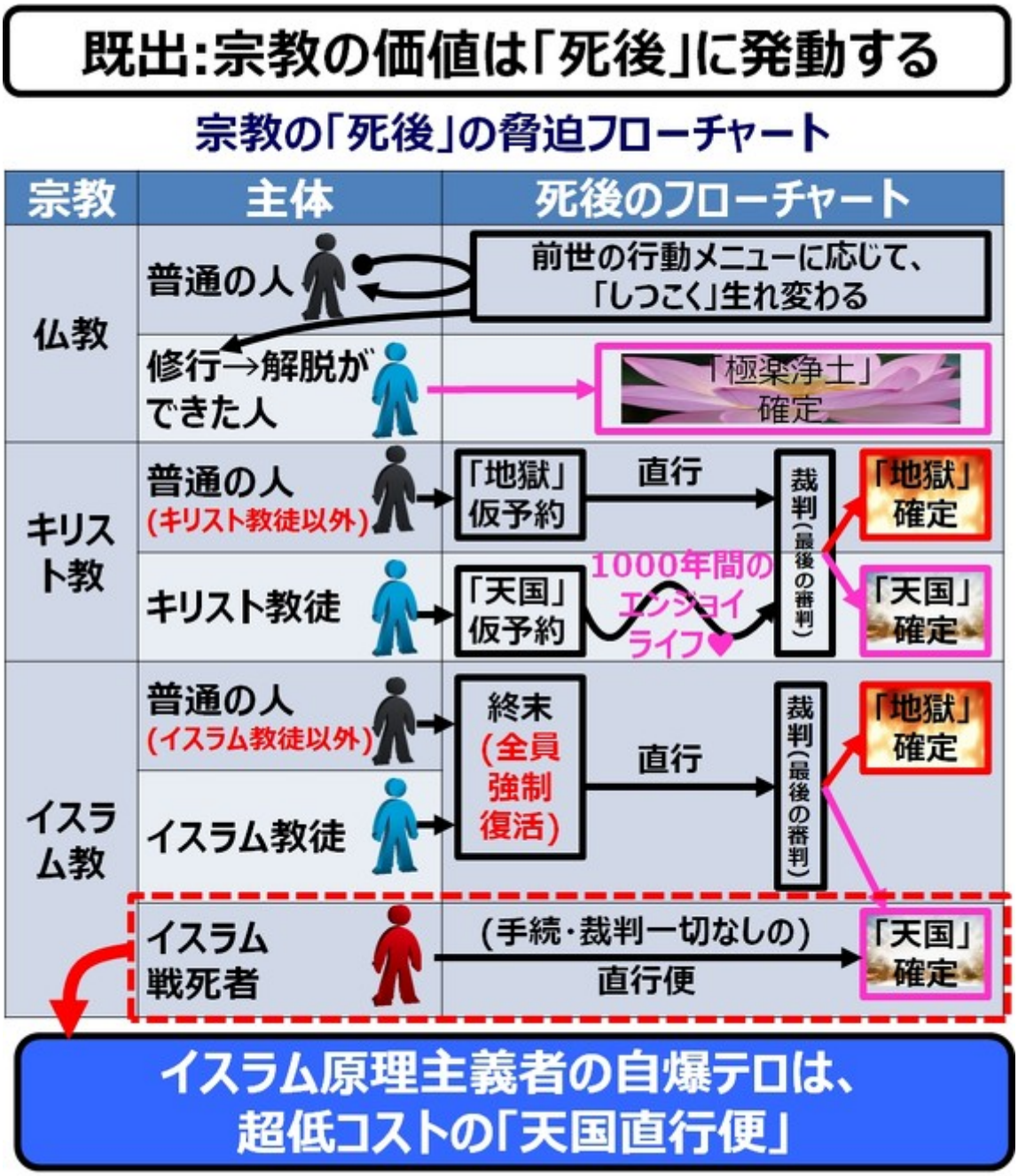
それはさておき。

もっとも、宗教は、現世で奇跡を起こし（科学的に耐えうる証拠はないようですが）、世界に秩序を与え、その秩序を実現する実施例をロジカルに説明する、という役割を担っているのは事実です。

その一方で、全ての宗教（団体）は、死後の世界のイメージ作りに余念がありません。膨大な時間とコストを注いでいます。信者の天国と、異教徒の地獄の描写は、相当具体的に描かれています —— **誰一人として、天国も地獄も見たことがないのに**、です。

特に地獄の方は、それはもう、生生しく、おどおどしく、具体的に描かれています —— 『そのエネルギーを、現世の信者や、世界平和のために使えよ』とツッコミたくなるくらいです。

この「天国」と「地獄」のビジョンは、信者獲得のための布教活動にとって、欠くことのできない非常に大切なプレゼンテーションであるからです。



「弱いままの人工知能 ～ “強いAI”を生み出すには「死の恐怖」が必要だ」から抜粋

なぜ宗教団体が、こんな、検証不能な死後の世界のイメージ作りに、膨大なエネルギーを注ぐかというと、「**リターンが大きいから**」です。つまり信者獲得率が高いのです。

これを、ゲーム理論を使って見事に説明するロジックがあります。「**パスカルの賭け**」です。

既出:宗教の強み:「パスカルの賭け」

事実：理性によって神の実在を決定できない
結論：それでも、神を信じた方がいい

ロジック：

		「神の有無」の死後の真相（確率50%）		期待値
		いた	いなかった	
現時点での自分の考え	「神は存在します」	天国行き +100点	何も起らない 0点	+50点
	「神なんぞいるか、ボケ!」	地獄行き −100点	何も起らない 0点	−50点

結論：神が実在することに賭けても「失うものは何もない」

「弱いままの人工知能 ～ “強いAI”を生み出すには「死の恐怖」が必要だ」から抜粋

「**神の存在が分からない現世にあっては、取りあえず神の存在を肯定しておくことが、死後における最適戦略である**」ということになります。なんともエゲつないロジックですが、これが宗教を支えている根幹です。

全ての宗教は、自分の宗教以外の信者を、全て異教徒としています。もし、「正解の宗教」があったとすれば、それ以外の宗教の信者は、全員纏めて地獄行きです —— つまり、**あるカルト宗教団体が、正解の宗教であり、唯一の天国へのゲートウェイであった、という可能性も、ゼロではないのです** —— でも、死んだ後でないと、分かりません。

求む、「見える化」

さて、カルト宗教団体の話に戻りますが、私、安心・安全な老後のためであれば、霊感商法だって、なんだってやるつもりではあります。仮にそれが、非人道的で、反社会的であったとしても、私以外の人のことは、二の次です。私にとって、常に大切なのは、この私です。

献金してもいいし、財産を譲渡してもいいし、社会的に弱者の人を喰い物にしても構わないのですが、それでも、**キャッシュフローが自分自身で確認できない**、というのは、なんとも気持ちが悪いなぁ、とは思います。

教団の幹部になって会計やその監査部門に就任できれば良いのですが、大学時代から、一生をささげてがんばってきた古参の信者に、シニアで新人の信者となる私が、その立場になることは不可能だと思います。

仮に、出所が怪しく、違法性の高いキャッシュ（お金）であったとしても、そのキャッシュフローと、そのシステムをきちんと理解した上で、教団の暗躍・・・もとい、教団の教義を実践したいのです。

つまり、私が教団に期待することは、「**見える化**」です。

江端が入会したいと思う(カルト)宗教団体

収支決算報告書くらいは、開示して欲しい

観点	概要	その他
信者数	正確な数と、年間増加率くらいは欲しい	成長中の宗教であれば、安心感がある
教義	(江端は、原則として気にしない)	法律的にセーフであれば、倫理面は目をつむってもいい
QoL	適度で、苦痛を伴う修行がないこと。衣食住とプライバシーが担保されること	修行は、科学的、論理的、合理的であること。また、自宅より高いQoLが提供されること
オープン性	教団の活動内容は、無制限かつ無条件に公開できること	もちろん、組織なのだから、クローズな部分があっても良いが、内部告発が保証されている必要がある
マイルストーン	数年/10年/30年単位の、教団の目標が明確になっていること	教団の方針が、コロコロ変更するようでは、困る
決算と監査	資産を提供する以上、その運用をモニタする権利があること	「もの言う信徒」を保証して欲しい
誠実	知らないことを、「知らない」と言える誠実さがあること	私(江端)が、腹を立てるから

そういう宗教団体がありましたら、ご紹介下さい

教団に入会するのであれば、小さい教団よりも大きい教団の方が安心でしょう。あと信者であれば、修行は避け得ないと思いますが、メンヘラを発生させるような過酷な修行は御免です。特に、修行をするなら、その内容の意義と目的がクリアでないと、私はやる気がでませんので、そこもお願いしたいところです。

あと、なけなしの財産をはたいて、世俗から離れるのですから、一定のQoL（Quality of Life）は保証してもらいたいです。最低限のプライバシーの確保も要求したいです。

今や時代は、オープン化、透明化です。教団の活動内容を、暗黒面も含めて公開することで、新規信者の獲得に貢献すると思います。あと、教団のKPI（Key Performance Indicator）などもきちんと設定して、中長期計画を、定期的に信者と社会に公開した上で、**世間の常識と闘って、新しい価値観を作り出す、くらいの気概のある宗教団体への入会を希望します。**

信者となった以上、寄進した財産や不動産の運用リターンを要求することはありませんが、**どのように運用されているかの現状報告は、きちんと説明してもらいたい**と思います。もちろん、よりよい教団運用のために「もの言う信者」として、教団に積極的に関わりたい、と思っています。

あと、教団に「**誠実であること**」を要求します。これは、「知ったかぶりをしない」ということであり、「知らないことは知らない」「分からないことは、分からない」と、ちゃんと言えること、です。

教義の薄っぺらな教団は、科学的な現象を、宗教的な話を無理に持ち込んで、自分の無知を露呈して、思いっ切り恥をかいています（少なくとも私は**冷笑**し、**軽蔑**しています）。

既出:宗教関係者が"利用する"量子論

カルト宗教が大好物な題材

検索ワード	宗教的なこじつけの例	判定
不確定性原理	物質現象と人の観測行為との繋がり（物質と意識の繋がり？）を示す	こじつけ
量子もつれ・量子テレポーテーション	遠く離れた二つものが一体として存在する。宇宙・世界の一体性を示す	こじつけ
量子脳理論	意識を司るのは、脳細胞ではなく、その中の量子である	(何を言っているのか、本当に分からなかった)

日常生活に全く関係のない量子の話を"こじつけ"て、一体、何を"説教"したいのか ？

＊）関連記事：「量子もつれ ～アインシュタインも「不気味」と言い放った怪現象」

それでは、多くの信者はだませても、私のようなエンジニア出身の信者は、だませません ――というか、教団の不誠実さに、失望してしまうでしょう（あるいは、教祖に忖度（そんたく）して、そういう無理なロジック作りに協力しているエンジニアの信者がいるのかもしれません）。

残念ながら、**現時点で、私の要求を満足するような宗教団体は、発見できておりません**。これらの条件の全てを見たす教団でなくても構いません。宗教団体の皆様におかれましては、ぜひ、江端へのプレゼンテーションをお願いしたいと思います。

あなたの教団が、日本中のどこにあれ、私は、自腹を切って、ヒアリングに参上させて頂く所存でございます。

それでは、今回のコラムの内容をまとめてみたいと思います。

【1】今回は、「**お金に愛されないものは、何をしても愛されない**」という開き直りから、「お金がなくても、幸せな余生をすごせる方法を検討するべきではないか？」に考えがシフトさせて、老後を生き残る「**戦略としての信仰**」を検討してみることにしました。

【2】「戦略としての信仰」を考えた上で、**反社会的、反モラルで、違法行為に及ぶこともある、「カルト宗教」にスコープをロック**しました。常識的なアプローチで、この江端の危機的状況を打破するのは難しいと考えたからです。

【3】これまでの人生で、いろいろなカルト宗教を調べてきた私は、今回、**架空のカルト宗教団体「江端教」**（教祖:江端智一、通称:”エバ・カンターレ”、位置付け:”メシア the final”、教義:”エバタ・プリンシプル”）**を立ち上げて、その概要の解説を試みました**。

【4】カルト宗教団体とは、（1）オリジナルの教義を『**剽窃（ひょうせつ）した上で、上書き**』し、（2）イエスでも、ブッダでも、アッラーでもなく、私こそが**”メシア the final”**であると言い放つ教祖がいて、（3） **オリジナルの教義は未完成であるが、私の教えで神の国が完成する**と、言ってのけ、 （4）法外な値段の物品セールスや、自己破産を看過する寄付などを、**真剣に、心の底から”救済活動”と信じている**、新興宗教団体である、と断じました。

【5】私が、このようなカルト宗教団体に入会する場合、最大の関心が、**私の終末期の取り扱い（入院、介護、メンタルケア）であること**を明確にした上で、これを保証している宗教教団は、**一つも見つけられていない**ことを報告しました。また、**私は、「このようなカルト宗教団体で、結構役に立つよ」**という自己アピールもしました。

【6】最期に「江端が入会したいと思う（カルト）宗教団体」の要件を並べました。（1）QoLやプライバシーが担保されていること、（2）教団のアクティビティがオープンになっており、（3）特にキャッシュフローがきちんと開示されること、そして、（4）科学的な現象を使った無茶な宗教的解釈を行わない、などの各種の条件を書き出した上で、**全ての宗教団体に対して、江端に対するプレゼン実施をお願いしました**。

以上です。

これでも「マイルドになった」のです

さて、今回のコラムをご覧になって、ほとんどの方は、「過激な内容だ」と思われたかもしれません。カルト宗教団体を知っている人なら『これは危険だ。止めた方がいい』と、心配されている方もいるかと思います。

実際、「カルトには、手を出すな」が、私たちの時代の共通認識でした —— 『一度でも、集会に連れていかれたら、終わり』であり、『批判した本人だけでなく、家族も友人も無差別に襲われる』というウワサが、まことしやかにささやかれていました。

しかし、大学時代の私を知っている人は、『江端ってば、まあ、すっかり丸くなって・・・』、『本当に、これが江端が執筆したの？　内容がマイルドすぎて、全く江端らしくない』と、真逆の方向で、驚いているかもしれません（筆者のブログ）。

今回はマインドコントロール、恐怖、思考停止について、あえて記載を避けています。それを書き出すと、今回のテーマである「**老後を生き残る戦略としての信仰**」から大きく逸脱すること

が、簡単に予想できたからです。

□

今回の執筆で参考文献としたのは、もっぱらカルト宗教団体からの脱会に成功した人の体験談でした。その人たちから語られる言葉を使って、自分なりに理解するように努めました。

『合同結婚式』を気持ち悪いと思うことや、『霊感商法』を反社会的な悪であると決めつけるのは簡単です。しかし、私は、この「気持ち悪さ」や「反社会的な悪」に**至るまでのロジック**については、これまで、十分に解説されていないように思いました。

そこで今回、私は、自分なりのやり方で、そのプロセス（教義の内容や、霊感商法を続けさせる方法など）の理解に努めました。その結果、自分の中ではかなりスッキリすることができました。ただ、同時に、『この問題、簡単には片づかない』ということも実感してしましました。

個人的意見ですが、私たちは『自分の責任で、自己破滅する権利』も持っていると思っていますので、**自分の信仰した宗教で破滅するのも、また一つの生き方**かと思うのです。

しかし、ただ、この宗教による影響は、本人だけにとどまらない点にあります。いわゆる「二世問題」と言われるものも、その一つです。

私は、ティーンエイジャのころから、もし両親が宗教にハマったら、即座に逃亡しようと考えていましたし、妻や子どもにも、その危険性については十分に教えてきました —— いざとなったら、私は妻や子どもであっても縁を切る覚悟がありますし、逆に私がそのような状態になったら、妻や子どもに『その場で私を捨てろ』と言い含めています。

娘たちには、「**友人が宗教にハマったら、絶対に助けようなどと思うな。無駄だから。やれることは一つ、そいつから全力で逃げ続けろ**」と、何度も言い含めています。

□

もう、数年前のことになると思いますが、長女が、京都大学の吉田寮に宿泊してきたこことがありました。アニメ「四畳半神話大系」のオープニングに登場する寮です（YouTubeに飛びます）。なんでも、演劇サークル関係での集まりで参加したそうです。

「自治寮」「演劇」とくれば、もう、これは「学生運動」だな、とか思っていたのですが —— まあ、彼女は、そういう風にはならなかったようです。『これからは、長女と、熱い政治論を闘わせられるのかな？』とか思っていたのですが —— 江端家において、そのような議論は、1秒間も発生しませんでした。

それどころか、警察から『娘さんが、公務執行妨害で逮捕され、現在拘留されています』という電話を受けたことが一度もない、というのは、保護者として本当にありがたいことだ、と思っています。

比して、私の親（母）は、京都の大学で学生運動関連の事件があると『アンタ、何もしていないわよね！』と電話をかけてくる人でした。しかし、母は、そういう方面には疎い人間でしたので、うちの親に、いらん知恵を付ける困った親戚がいたように思えます。

　そのような電話に対して、私は、『そんな時間があれば、生活費稼ぎのバイトしとるわ、ボケ！』と、怒鳴り返して、電話を叩き切っていました。

□

　まあ、母親の心配には、それなりに根拠はありました。私が、学寮（自治寮）に住んでいたからです。自治寮というのは、大抵の場合、政治運動とリンクしていました（今は知りませんが）。

　私が学寮に住んでいた最大の理由は、寮費が安かったからです。そして、家賃格安の自治寮に住み続けるために、私も『いろいろと"やらなければならないこと"』があったのです（寮長とか）。

　しかし、私は、政治運動には、最後まで熱中できませんでした。少なくとも、電気の勉強 ―― 特に、自力でコーディグしたZ80パソコンでの電子回路のシミュレーション ―― への情熱と比べれば、政治など、棒にも箸にもかからないくらい、どーでもいいことだったのです。

　正直、工学部の厳しいカリキュラムに追い立てられながら、週に1回または2回の徹夜をしながらレポートを書いて、週7日のバイトを続けていた、この身の上から言えば ――

講義にも出席せず、平気で留年して、酒を飲みながら大声で政治を語るあいつらは、私にとっては、『憎悪の対象』だったように思えます。今、思い出しても、あいつらには腹が立ちます。

　やがて、学業とバイトの両立が軌道に乗り、天下一品のラーメンに唐揚げを付けることができるようになり、友人たちから『江端財閥』とまで言われるようになった私（本当）は、退寮を決意しました。

　私は、自分で稼いだお金で、下宿を始めた日の爽快感を覚えています。

―― あの下らない『総括』の日々から、やっと開放されたぁぁぁぁあああ

と。

□

　さて、私のこの学生時代の話、今回のコラム（の前半）の話に、似ていると思いませんか。

　私は、カルトからの脱会を考えている方に、「神様や、イデオロギーや、仲間とか、そういうものを全部失うことになったとしても、『意外に大丈夫だよ』」と、言いたいのです。

　もし、仮に平気でなかったとしても、**あなたの入会を心待ちにしているカルトや政治団体は、この国には、腐るほどあります** ―― ですから、この機会に教団の活動に疑いを感じている信者の方は、「教団脱会」を前向きに検討してみてください。

「江端が作るカルト教団は、もうそれだけで十分な社会悪」

　今回は、いつもレビューをお願いしている後輩の都合がつかなくて、20年間ほど音信不通であった先輩に、掲載前夜（8月30日）に、思い切って連絡をして、レビューをお願いしました。今

回のこのネタに限れば、後輩のピンチヒッターとして頼める人間が、先輩以外に思い付かなかったからです。

　この先輩こそ、日本停滞党の党是『**万国の労働者よ！　停滞せよ！！**』の精神的支柱を構築し、心を揺り動かす檄文（げきぶん）の数々で、私を魅了しつづけた、”エルカンターレ先輩”こと、通称『L先輩』です（ちなみに、嫁さんは、今でも、気安く”**エル**”と呼んでいます）。

　L先輩はレビューを快く引き受けてくださり、20年間の時間を感じさせない鋭いビジョンで、私を圧倒し続けました。

L先輩：「このコラムは、江端の『安全で安心な老後の生存戦略』の話なんだよな」

江端：「そうです」

L先輩：「じゃあ、『カルト教団に入団する』というような消極的なアプローチではなくて、むしろ、『カルトを活用して金もうけをする』という方向が正しいんじゃないのか？」

江端：「と、いいますと？」

L先輩：「まずは、科学的アプローチからの、『汎用的な洗脳技術』の研究開発と、そのビジネスモデルの確立が最優先課題だろう。いまさら、少子化問題やら、介護問題や、都市問題なんぞやって、どうする？ぶっちゃけ、手遅れだよ。いっそうのこと『**洗脳技術で競合に勝つ**』、というくらいの、思い切った研究提案をしてはどうだ」

江端：「定年前の私を、今、クビにするつもりですか？」

L先輩：「確かに、”洗脳”ではイメージが悪いか・・・では、『**教祖学**』だな。これから、教祖になるノウハウを確立して、自らが教祖になる、というのが、てっとり早いんじゃないか？」

江端：「言っちゃなんですが、私が、教祖になれると思いますか？　自分で言うのも悲しいですが、私の人望はゼロどころか、マイナス方向に振れていますよ」

L先輩：「そこが発想の転換点だ。何も自分が教祖にならなくたっていい。『**人望がないあなたも教祖になれる！**』『**何の信念もないのに教祖になれる！**』『**神の啓示なんぞ、1ミリ秒も聞こえてこないあなたも、教祖になれる！**』という —— **教祖セミナー**で稼ぐんだ」

江端：「”私”が”教祖”にならなくてもいいんですか？」

L先輩：「ちまたの**投資セミナー**と同じことだ。もうかる手法を、他人に開示するなんて、合理的に考えてみれば、開催される理由がない。そんなセミナー開く暇があったら、自分で資金を集めて自分で資金を運用すればいいだけだろう。わざわざ、他人に金もうけのノウハウを開示する合理的理由があるか？」

江端：「・・・ないですね」

L先輩：「つまり、投資セミナーとは、もうかる保証のない方法を他人に開示して、『後は自己責任で、よろしく！』とほったらかしにして、受講料だけを搾取するイベントだ。それに、**教祖セ**

ミナーは、まだ市場が未開拓だ。競合がいないんだから、江端は、テキトーなことをベラベラしゃべっていればいい」

江端：「・・・」

L先輩：「受講者が失敗したら、『あなたは人間的に魅力を、もっと高めれば成功します。ところで、こちらは、”あなたの魅力を高めるセミナー”のご案内です』と言って、また次のセミナーに誘導することもできる」

江端：「うん・・・確かに行けそうですね。詐欺罪は、『故意に虚偽の事実を伝える』という構成要件が必要ですが、教祖セミナーという形であれば、”虚偽の事実”の立証することが難しそうです。100人受講すれば、1人くらいは教祖になれるかもしれませんし・・・それに、私（江端）なら、その辺のロジック作りができるような気がします」

L先輩：「その他にも、”教祖”として教団を運営するのは面倒だろうから、**死後救済セミナー**、という形で、会費を徴収する、という手もあるぞ」

江端：「なんですか？その『死後救済セミナー』って？」

L先輩：「端的に言えば、『このセミナーで教えた通りの生活を続けていれば（例えば、一定金額を、毎月、江端の口座に入金していれば）、死後の審判において、あなたは、被告席に座らなくても良くなります』という内容のセミナーだな」

江端：「はぁ？」

L先輩：「つまり、”終末裁判免責特権”だ。『**あなたは死後、被告席の着席は免除されます**』『**いきなり、裁判官または陪審員の席に座ることができます**』を唄うセミナーだ」

江端：「それ、単なる免罪符＊）の話でしょう？」

＊）カトリック教会が、浄財（献金）などを代償として信徒に与えた一時的罪に対する罰の免除証書。中世末期、教会の財源増収のため乱発されて、ルターの宗教改革のきっかけとなった。

L先輩：「そこを差別化するんだ。『神』だの『仏』だのではなく、江端の持っている法律ロジックを投下するだけでいい。大丈夫だ、『法律』という文言だけで信用してしまうチョロイ人間は山ほどいる。これで、宗教を越えた、死後救済の新しいパラダイムのビジネスの完成だ」

江端：「そんなにうまくいきますかねえ・・・。ところで、いつの時代も、カルト宗教団体は、金銭トラブルの巣窟（そうくつ）といってもいいくらいですが、一体、かれらは、どんな悪意をもって金もうけをしようとしているのでしょうか？」

L先輩：「いや、彼らには悪意はないよ。そこは賭けてもいい。**彼らは、100%善意で行動している**」

江端：「そうですか？ならば、もっと世の中の人々にとって、分かりやすい善意で行動すればいいのに、なんで、あんなに分かりにくい、はっきり言えば**世間から憎悪されるようなやり方**しかできないんでしょうか？彼ら、バカなんですか？」

L先輩：「そうではなくて、世間に迎合する方法では『**特別**』になれないからだ。『私は多くの人間とは違う』、つまり『私は、人とは違って、選ばれた存在である』であることを示したい、だから、あえて世間と逆方向に進むことで、『**おまえたちは真理が見えていない。私たち信徒だけが見えている。私たちには、おまえたちを導く義務がある**』と、**他人を見下すことで特別になれる**、というロジックで彼らは動いているんだ」

江端：「それは、『特別』が強化されるためには、世間から迫害され続けなければならない、ということですよね。それはつらく、厳しい生き方のようにも思えますが」

L先輩：「逆だ。基本的に奴らは**ヘタレ**だ。『特別でありたい』という自己虚栄心だけは一人前のくせに、『一人では嫌』という、孤立して生きる覚悟がないから、仲間を求めてカルト宗教にハマっていくわけだ」

江端：「カルト宗教をたたきつぶす方法って、ないでしょうか？　正直、私、うっとうしくてしょうがないのです。今後も、法律の規制くらいでは、カルトはつぶせそうにありません」

L先輩：「そうだなぁ・・・ならば、別のカルト教団を作る、というのはどうかな？」

江端：「は？」

L先輩：「うん、キリスト教系のカルトであるなら、同じ、キリスト教系のカルトが望ましいだろう。仏教系やイスラム教系ではダメだ。同じキリスト教系のカルトで、その教義がそっくりであればなお良い。そんでもって、ほんの一部だけ、教義の内容が違う、というのが望ましい ―― そうだなぁ、**本文の、エバタ・プリンシプルの『四位一体』を『五位一体』とするくらいの、わずかな違いにするといい**」

江端：「・・・」

L先輩：「賭けてもいいが、これだけで、双方のカルト教団、**殺し合いを始めるぞ**」

江端：「そういうものですか？」

L先輩：「分派したキリスト教教団同士の血みどろの歴史を見れば、そんなこと明らかだろう？　それに、70年代安保の左翼の内ゲバについては、江端の方が詳しいはずだ。その辺、よく知っているんじゃないのか」

江端：「はい・・・その通りです。教義または思想がそっくりだからからこそ、外側から見ると全く分からないような、ささいな違いが、内側同士では、殺意を覚えるほどの異端に見えて、殺し合いに発展しています。ほぼ100%です」

L先輩：「そもそも、あの教団は、19世紀～20世紀に世界を席巻した『共産主義』というカルト宗教のアンチテーゼとして発生したと自称しているくらいだ。昨今、『共産主義』は勝手に自壊しつつあるようだけど、これも『カルト対カルトの闘争だった』と言えば、言えるんじゃないかな」

江端：「なるほど。とりあえず、私は、カルト教団をたたきつぶすために、別のカルト教団を立ち上げればいいんですね。それでは、これから、その方向で検討を始めます」

L先輩：「江端の作るカルト教団か・・・もう、それだけで、十分な社会悪になると、確信できるなぁ」

Profile

江端智一（えばた ともいち）

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈（しれつ）を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣（しんらつ）な切り口で語られるエッセイをWebサイト「こぼれネット」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

Copyright © ITmedia, Inc. All Rights Reserved.